

はじめに.....003

第1章 今井正の評価をめぐる

- 1 本書のねらい.....018
- 2 今井正略史.....021
- 3 今井正をめぐる先行研究.....025

第2章 軍国と反軍国のあいだ

- 1 対立と交渉のメロドラマ——『沼津兵学校』.....039
  - (1) 一九三九年前後の「歴史映画」をめぐる言説.....039
  - (2) 盲蛇におじず.....043
  - (3) 帝国の空間——「崩壊するものと前進するもの」.....045
  - (4) 開かれた空間と閉じられた空間.....049
  - (5) 今井正の「心のなか」.....063
- 2 軍国的ファミリー・メロドラマ——『われ等が教官』.....064
  - (1) 軍神もの.....065
  - (2) 軍国的ハッピー・エンド.....068

3 帝国の生産性——『多甚古村』

- (1) 「映画の使命は国民指導にある」.....073
- (2) 「完全な失敗作」.....077
- (3) 帝国の架空の空間.....081
- (4) カメラを回し続ける.....085

4 あるべきメロドラマ——『女の街』

- (1) 銃後のあるべき姿.....090
- (2) 「誰が何と言おうと平気ですわ」.....094
- (3) ラジオを切る.....099

5 『閣下』

.....102

6 健全なクリシエ——『結婚の生感』

- (1) 映画の「臨戦態勢」.....105
- (2) 相次ぐ「悪評」.....108
- (3) 結婚のクリシエ.....112

7	帝国の態度と言及——『望楼の決死隊』	118
(1)	映画の「決戦」	119
(2)	朝鮮ロケの日本版『ポー・ジェスト』	122
(3)	「帝国」を投影する	125
(4)	「植民地」を投影する	134
8	背を向ける——『怒りの海』	137
(1)	苦悩する軍艦の父	139
(2)	フィルムを削る	145
9	帝国の視線と植民地の凝視——『愛と誓ひ』	146
(1)	今井正の沈黙	146
(2)	擬似家族関係	149
(3)	重層的テキスト	152
第3章	欲望と限界のあいだ	159
1	矛盾と混乱	160
2	二つのテーマ——反戦と弱者	168

3	反戦——『また逢う日まで』	171
(1)	東宝争議という転換点	171
(2)	現実と、それに抵抗する非現実	174
(3)	抑圧されたものの帰還	181
4	反戦、そして弱者——『ひめゆりの塔』	187
(1)	『ひめゆりの塔』をめぐる言説	188
(2)	対立する二つの「声」の狭間で	191
5	弱者、あるいは他者——『あれが港の灯だ』	204
(1)	植民地他者への思い	205
(2)	境界線のアイデンティティ	206
(3)	重なる他者への記憶、パランプセスト	214
おわりに		219

註		225
今井正の再発見——四方田大彦		252
あとがき		258
主要参考文献		262